満月雑記帳 985

連載エッセイ

Mangetsu Zakkicho
Nakano Midori

中野翠

Layout Kikuchi Nobuyoshi

『あまちゃん』紅白

締め切りの関係で、すっかり時期遅れの話題になってしまうのだけれど、でもやっぱり書いておこう。二〇一三年大みそかの『紅白歌合戦』の話。

前々から『あまちゃん』にちなんだ演出が見どころになるんではないかと言われていたけれど、その通りになりましたね。北三陸の町に暮らす、おなじみの顔ぶれが『紅白』に乱入する。小泉今日子と薬師丸ひろ子が『あまちゃん』の印象を残した衣裳で晴れの舞台に立って歌う。『あまちゃん』のあの世界にもっとひたっていたかったなあという未練心も、この『紅白』でやっと大団円を迎えたなあという感じだった。

紅組司会の綾瀬はるかはセリフがもうひとつ頭に入っていなくてたどたどしかったけれど、悪びれた感じはまったくなくて不思議な大物感（？）を漂わせていた。白組司会の嵐はソツなく綾瀬のミスをカバーしていた（それにしても嵐は大忙し。七、八回は衣裳チェンジしていたんじゃないだろうか）。

紅組はNMB、SKE、AKBと四十八人のグループが三つも出ていた。太腿乱舞。ひたすらワサワサ・ドスドス・ゴテゴテという印象。私なぞにはそれぞれのグループの違いがわからない。楽曲も頭に残らない。一つでいい、一つで。

『紅白歌合戦』。竜に乗って「まつり」を歌う北島三郎さん。

そんな中でオッと身を乗り出したのは、ももいろクローバーZ。こちらは五人なので相対的にスッキリ見えた。キンピカ観音のごとき奇怪衣裳で奇怪楽曲を歌い踊る。「なんだなんだなんだ!?」と驚きつつ、その祝祭的なと言うか痴呆的な世界に引きずり込まれてしまった。私にとっては今回の『紅白』一番の見もの聴きものだった。

おやっ～!?と思ったのは、藤あや子＋壇蜜の『紅い糸』。きもの姿にヒールの高いゲタなんか履いて、明らかに吉原かどこかのおいらんを連想させる。いいのか、NHK!? サバケすぎじゃないのか!?

今時の歌に疎くなってしまっているので、『紅白』はそれをまとめて聴ける、いい機会になっている。こうしてジックリ聴いてみて、やっぱり思うことは「歌詞がつまらない」。歌詞に具体性がない。情景も物語も描写もない。スカスカで素人くさい。それなのに歌い手は思い入れたっぷり、顔を歪ませ、身をねじり、せつせつと歌うのだ。白けるったらありゃあしない。

第一、「ら抜き」ですからね。「生きれない」なあんて言うのだ。ちゃんと「生きられない」と言ってもらいたい。なぜ「ら」一字ケチるのか、わけがわからない。「ら」はキレイな響きだというのに。

さて、終盤は泉谷しげるが「個性」を見せつけた。自分の歌に観客が手拍子を打ったことに対して、なぜか怒りを爆発させたのだ。ほんとうになぜなのか、全然わからない。異様な緊張昂揚状態になると、それが自動的に怒りという形で噴出するというタイプの人なのだろうか？ もしそうだったら、めでたいお祭りといった場には出ないほうが無難だろう。後味のいいものではなかった。

クロスオーバーの人

『紅白』のあった大みそか。昼間のラジオで大瀧詠一さん急逝の報に接し、ショックを受けた。六十五歳。自宅でリンゴをかじっていて、突然倒れたという。

大瀧詠一さんの仕事は多岐にわたっていて、しかも大変マニアックで、私なんぞは追悼する資格は無いようなものなのだけれど……。私が最も興味をひかれ、大瀧詠一さんならではと思ったのは、西洋渡りのロックと日本の歌謡曲を、同等の重みや熱意を持ってクロスオーバー的に語るところだった。

特にすばらしかったのが、ラジオで語り込んだ小林旭論。実際、大瀧さんは小林旭に『熱き心に』という名曲を提供しているが、小林旭の声と歌いっぷりに対する惚れ込みよう、そしてその分析力にはまったくホレボレさせられたものです。

昔の日本映画に対してもマニアックな関心を示し、ロケ地を訪れては楽しんでいたという。閉じこもるのではなく、外に開かれた、解放的で、たくましい、良性のマニア。

大みそかの夜。日付が二〇一四年一月一日になった瞬間、近くの晴海

『みずいろメガネ』中野翠　毎日新聞社　1,300円(税込)

埠頭に停泊中の船から霧笛が鳴り響いた。大瀧詠一さんをおくるサウンド、と思うことにした。

タイガースの一夜

話はさかのぼる。十二月二十七日、夜。ザ・タイガースのコンサートを観に東京ドームへ。

前回はピー（瞳みのる）の復帰で沸いたのだけれど、今回はさらにトッポ（加橋かつみ）の復帰で、四十四年ぶりに結成当時の顔ぶれに。

会場は天井近くまでギッシリの超満員。私は三十年来親しくしている女友だち三人とアリーナ席で観たのだけれど、観客の八割は年増の女の人という感じだった。

ライトがパンと点いて、ステージ上に黒いスーツを着た五人の姿が浮かびあがって来ただけで、もう目頭が熱くなってしまった。

前半は、ビートルズやローリング・ストーンズなど洋楽のカバーで、贔屓目かもしれないけれど、演奏面では昔より巧くなっているんじゃないか!?と思った。昔はアイドルだったけれど、そうか、彼らを結ぶ絆はロックへの憧れだったのね、みんなロック小僧だったのね、と、今さらながらに気づかされた。

全員、白髪頭になっていて、ジュリー（沢田研二）なぞは体型も激変（白いアゴヒゲを伸ばしていてサンタクロースのようだった）しているわけだけれど、歌声も演奏も力強く、若々しい。

時どき不思議な気分がよぎる。今、目の前に見えている姿は何かの冗談でジイサンぽく変装しているだけなんじゃないか!?と。

キンピカ観音のごときももいろクローバーZ。
今回の『紅白』一番の見もの聴きものだった。

シロー（岸部四郎）も兄のサリー（岸部おさみ＝一徳）に付き添われて車椅子にて登場。ずいぶん弱ったふうに見えたけれど、とぼけたシャベリは健在で、ビートルズの「イエスタディ」を味わい深く歌う。

短い休憩をはさんでの第二部は白のスーツにてタイガース時代のヒット曲を続々と。

『僕のマリー』『モナリザの微笑』『花の首飾り』など、今にして思えば、少女の夢を乗せた、まったく甘ったるい歌詞なのだけれど、当時の自分のさまざまな場面、情景、気分などがパタパタと幻燈のように思い出され、感きわまってしまうのだった。

私は、どういうわけだか自分でもよくわからないが、サリーのファンだった。タイガースの中では兄貴分というかリーダー役のようだったところに惹かれたのかもしれない。その頃は、当然、今のようにドラマの世界で貴重なバイプレーヤーになるとは思いもしなかった。

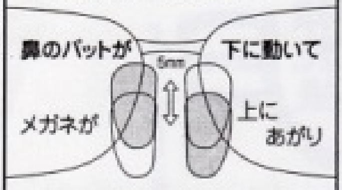
結成当時のメンバーが再結成されるまでの道のりは平坦なものではなかったらしい。ジュリーは自由が丘の酒場で、偶然、ピーもその酒場を訪れていることを知り、その酒場で待ち構えるようにした。トッポには何度も留守番電話やメールを送って、メンバー復帰を呼びかけたという。

やっぱりジュリーの人柄のよさがカナメだったんだなあと思う。

還暦を過ぎても、五人全員が揃って元気。いっしょに観ている私たち旧友同士も、とりあえず健在。会場内の年増観客たちもそれぞれの人生を歩んで、今、この一瞬のキラメキの中にいる。共に生きて来た、共に生きよう――そんなしみじみとした気分に襲われたコンサートだった。

最新刊 スッコーンと明るく深く生きられたら…

遠近両用メガネを
お使いの方に…



近くが見やすくなります!

遠近Vパット

特許4833954号

今、お使いのメガネを
手で少し持ち上げて
小さな文字を見て下さい。
楽に、はっきり見えたでしょう。

この文字が楽に、はっきり見えますか？遠近両用メガネは手元の小さな文字を見るときにアゴを突き出して見る様になってしまい、格好が悪いとよく言われますが、メガネを少しだけ上に上げると見やすくなります。

メガネ店で鼻のパットを
遠近Vパット
に交換して下さい
定価 ¥1,400（税別）

動画が見られます

ケンコーコム kenko.com Amazon®
でもご購入できます

遠近Vパット 検索

(株)ハセガワ・ビコー
TEL.03(3655)4321
http://www.bicoh.co.jp
E-mail:info@bicoh.co.jp